

大豆「里のほほえみ」の良質安定生産の確立

要約

地域の播種適期（慣行播種）より早播きを行うと、収量性は同等であったが、品質（裂皮粒）は慣行播種に比べ、低下する傾向が明らかになった。

○ 展示のねらい

大豆新品種「里のほほえみ」について、播種時期の違いが収量及び品質（裂皮粒・しわ粒）に及ぼす影響を明らかにし、安定栽培法を確立する。

○ 主な成果

図1生育調査結果

試験区 (播種日)	主茎長 cm	節数 節	分枝数 本	莢数 莢/m ²	着粒数 粒/株	倒伏程度
早播区(6/14)	64.5	13.5	4.8	476	68	0.0
慣行区(6/26)	63.9	13.5	5.1	384	56	0.0

播種時期の違いによる最終的な生育量の差はほとんどみられなかった。ただし、初期生育は播種後の降雨の影響により早播区が慣行区より優っていた。

図2 収量及び品質調査結果

試験区 (播種日)	収量 kg/10a	百粒重 g	裂皮粒 %	しわ粒 %	べと病粒
早播区(6/14)	275	41.4	6.9	0.2	1.7
慣行区(6/26)	281	43.6	3.2	0.0	3.0

播種時期の違いによる収量差はみられなかった。品質については、早播区で裂皮粒割合がやや高くなった。生育期間中、葉のべと病斑はいずれの区においてもみられ、子実への発生もわずかにみられた。



左側：早播区(6/14)
右側：慣行区(6/26)
早播区、開花期
(8月1日現在)

○ 今後の方向性

収量及び品質の安定化のためには、極端な早播きは避け、6月下旬での播種作業が必要である。一方で、近年の気候変動（播種時期の降雨等）に対応する播種適期幅の拡大に向けた播種時期の違いによる播種量や播種密度の検討を進める。

実施機関：上都賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：日光市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315